

## ■ 概況

10/7～10/13のNYMEX・WTI先物市場は、78.30～80.64ドルの範囲で推移した。

10月14日は、世界的な需給逼迫への警戒感を受けた買いに支えられ反発し、11月限の終値は、前日比0.87ドル高の81.31ドルと、引き続き約7年ぶりの高値水準で取引を終えた。

国際エネルギー機関(IEA)が14日に発表した月報で2021～22年の世界の石油需要見通し上方修正。天然ガスや石炭の価格上昇を背景に、代替エネルギーとしての石油の需要が増えるとの見方を示した。一方でOPECプラスは4日の会合で大幅増産方針の決定を見送り、慎重姿勢を堅持。この日はOPEC盟主サウジアラビアのアブドゥルアジズ・エネルギー相が改めて増産幅拡大に応じない方針を表明したと伝わり、エネルギー危機への警戒感が増幅。相場は買いが先行し、一時81.68ドルまで上昇した。

週末15日は、エネルギー供給逼迫観測が強まる中、続伸し、11月限の終値は、前日比0.97ドル高の82.28ドル。朝方発表の9月の米小売売上高が市場予想に反して増え、堅調な米景気を受けた原油需要の拡大観測も相場を支えた。

米国内の稼働中の石油掘削装置は前週末比12基増の445基となった。

週明け18日は、3日続伸し、11月限の終値は前週末比0.16ドル高の82.44ドルで取引を終えた。早朝に83.87ドルと7年ぶりの高値を更新したが、18日発表の9月の米鉱工業生産指数の低下が需要鈍化の観測を招き、伸び悩んで終えた。

19日は、4日続伸し、11月限の終値は前日比0.52ドル高

の82.96ドルで終えた。世界的な需給ひっ迫が長期化するとの見方が強まったほか、冬季の暖房需要による価格上昇を織り込む買いも入った。

20日は、5営業日続伸し、11月限は一時、84ドル台に乗せ、2014年10月以来7年ぶりの高値を更新した。終値は、前日比0.91高の83.87ドル。

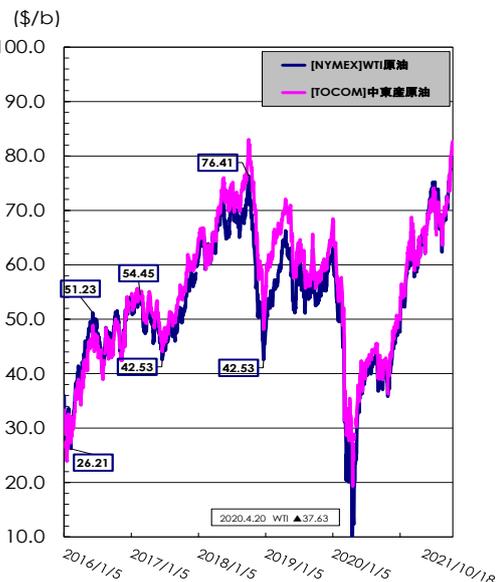
アジアの指標原油である中東産パイ原油/東京市場(12月渡し)は、10月7日～10月13日の間、79.00～81.50ドルの範囲で推移した。10月14日81.80ドル、15日82.90ドル、18日83.70ドル、19日82.90ドル、20日82.50ドルで推移した。

為替は10月7日～10月13日の間、111.40～113.50円の範囲で推移した。10月14日113.39円、15日113.89円、18日114.27円、19日114.20円、20日114.68円で推移した。

財務省が10月20日に発表した貿易統計(速報・旬間)によると、9月下旬の原油輸入平均CIF価格は、51,115円/klで、前旬比283円高、ドル建て73.96ドルで前旬比0.46ドル高、為替レートは1ドル/109.88円。また、同日発表の貿易統計(速報・旬間)によると、9月の原油輸入平均CIF価格は、51,009円/klで、前月比27円高、ドル建て73.81ドルで前月比0.05ドル高、為替レートは1ドル/109.87円。

そのような中で、10月18日時点の小売価格は、ガソリンが前週(10月11日)比2.5円の値上がり、軽油は同2.5円の値上がり、灯油は同46円の値上がり(18㍻ベース)だった。ガソリンは7週連続の値上がり、軽油も7週連続の値上がり、灯油も7週連続の値上がりだった。この週(10月第3週)の原油コストは値上がりし、次週の元売の卸価格はガソリン・軽油・灯油ともに、前週比2.5～3.0円の値上げとなった模様。

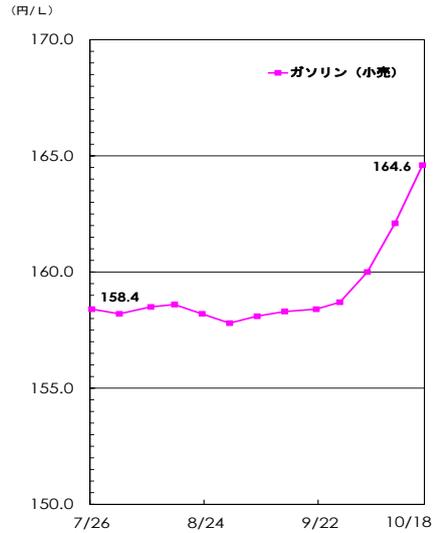
原油		今週	前週比	前年比
需給	原油処理量 (千kl)	10/10～10/16	2,821 ▲77	▲-
	トッパー稼働率 (%)	"	73.3 ▲2.0	▲-
	原油在庫量 (千kl)	10/16	10,027 ▲299	▼-
価格	中東産原油(TOCOM) (\$/bbl)	10/18	82.74 ▲2.05	▲39.8
	WTI原油(NYMEX) (\$/bbl)	10/18	82.44 ▲1.92	▲41.6
	原油CIF単価 (\$/bbl)	9月下旬	73.96 ▲0.46	▲27.71
	①原油CIF単価 (¥/kl)	"	51,115 ▲283	▲20,290
	②ドル換算レート (¥/\$)	"	109.88 ▲0.07	▼-3.93
	外国為替TTSレート (¥/\$)	10/18	115.27 ▼-1.97	▼-8.87



(単位: 千kl、円/%)

ガソリン		今週	前週比	前年比	
需給	生産	10/10 ~ 10/16	841 ▲ 17	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	830 ▲ 72	▲ -	
	輸出	"	0 ▼ -169	▼ -	
	在庫	10/16	1,511 ▲ 10	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	10/12 ~ 10/18	74.5 ▲ 2.4	▲ 31.5	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	10/12 ~ 10/18	75.6 ▲ 3.5	▲ 36.4
		(TOCOM/中部)	10/18	76.5 ▲ 3.7	▲ 35.2
	小売 [週動向] (資工庁公表)	10/18	164.6 ▲ 2.5	▲ 30.6	

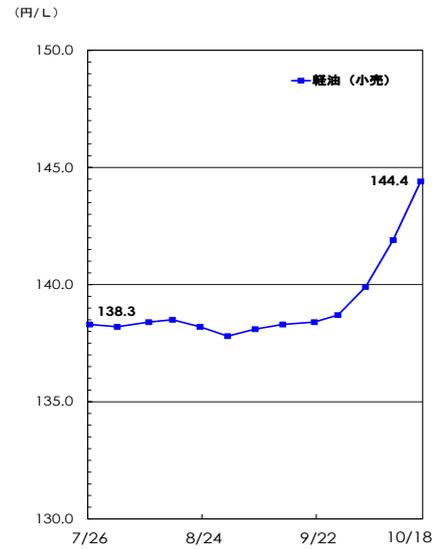
※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

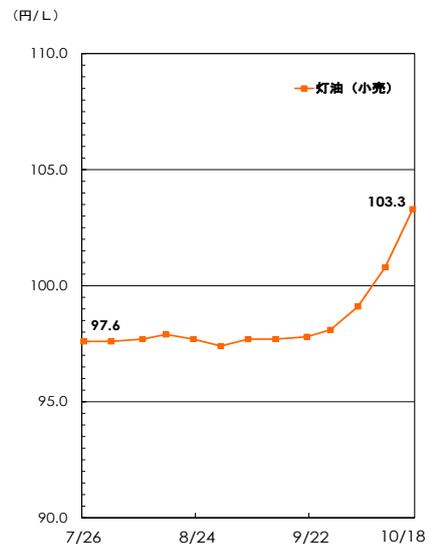
軽油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	10/10 ~ 10/16	689 ▼ -37	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	597 ▼ -23	▲ -	
	輸出	"	132 ▼ -54	▲ -	
	在庫	10/16	1,422 ▼ -39	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	10/12 ~ 10/18	75.3 ▲ 2.2	▲ 29.8	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	10/12 ~ 10/18	76.3 ▲ 1.6	▲ 29.3
		(TOCOM/中部)	10/18	-	-
	小売 [週動向] (資工庁公表)	10/18	144.4 ▲ 2.5	▲ 29.6	

※業転、先物価格は税抜き価格



(単位: 千kl、円/%)

灯油		今週	前週比	前年比	
需給	生産	10/10 ~ 10/16	279 ▲ 106	▲ -	
	輸入	"	n.a.	n.a.	
	出荷	"	179 ▲ 64	▼ -	
	輸出	"	24 ▲ 24	▼ -	
	在庫	10/16	2,674 ▲ 76	▼ -	
価格	業転 [陸上ローリー 4地区平均] (RIM)	10/12 ~ 10/18	75.0 ▲ 2.0	▲ 29.8	
	先物 [期近物/終値]	(TOCOM/東京湾)	10/12 ~ 10/18	75.4 ▲ 2.9	▲ 33.0
		(TOCOM/中部)	10/18	76.7 ▲ 1.7	▲ 32.4
	小売 [週動向] (資工庁公表)	10/18	103.3 ▲ 2.5	▲ 23.1	



■ 関連情報

1 海外/原油

10月20日のNYMEXのWTI先物原油は、原油・石油製品の在庫減少を示す統計の発表をきっかけに買いが優勢となり、5日続伸し11月限は一時、84ドル台に乗せ、2014年10月以来7年ぶりの高値を更新した。終値は前日比0.91ドル高の83.87ドル、12月限の終値は0.98ドル高の83.42ドル。米エネルギー情報局(EIA)週報で、15日までの週の原油在庫が190万バレル増の市場予想に対して40万バレル減となったほか、石油製品もガソリンが540万バレル減、ディスティレート(留出油)が390万バレル減と、それぞれ大幅な取り崩しとなった。また、WTI原油の受け渡し拠点、米オクラホマ州クッ

シングの在庫が約3年ぶりの低水準となったことも明らかになったことが、供給逼迫懸念の高まりにつながった。

EIAによると、10月18日時点のガソリンの小売価格は、前週比5.5セント値上りの1ガロン3.322ドル(101.0円/ℓ)、ディーゼルは同8.5セント値上りの3.671ドル(111.7円/ℓ)となった。ガソリンは3週連続の値上がり、ディーゼルは5週連続の値上がりとなった。

2 国内/製品需給 (1) 出荷

石連週報によれば、2021年10月10日～10月16日に休止したトッパー能力は39.3万バレル/日で、前週に対して2.0万バレル/日増加した(全処理能力は345.8万バレル/日)。原油処理量は282.1万klと、前週に比べ7.7万kl増加。前年に対しては36.0万klの増加。トッパー稼働率は73.3%と前週に対して2.0ポイントの増加、前年に対しては9.0ポイントの増加となった。

生産は前週に比べてガソリン、灯油、A重油が増産、その他の油種で減産となった。

ガソリン/2.1%増、ジェット/37.5%減、灯油/60.7%増、軽油/5.1%減、A重油/11.7%増、C重油/29.7%減。今週のC重油の輸入は0.0万kl(前週比0.5万kl減)。軽油の輸出は13.2万kl(前週比5.4万kl減)。

出荷(輸入分を除く)は前週比でガソリン、灯油、A重油が増加し、その他の油種で減少した。

前年比ではガソリン、軽油、A重油、C重油が増加し、その他の油種で減少した。

ソリンの出荷は83.0万kl(対前週9.5%増)と3週振りに増加した。

ジェット4.1万kl(対前週16.5%減)、灯油17.9万kl(対前週55.7%増)、軽油59.7万kl(対前週3.6%減)、A重油19.7万kl(対前週7.9%増)、C重油13.2万kl(対前週31.7%減)。

(単位:千kl)

	今週 (10/10 ~ 10/16)	前週 (10/3 ~ 10/9)	前週比	
ガソリン	830	758	▲ 72	(9%)
ジェット燃料	41	49	▼ -8	(-16%)
灯油	179	115	▲ 64	(56%)
軽油	597	620	▼ -23	(-4%)
A重油	197	183	▲ 14	(8%)
C重油	132	193	▼ -61	(-32%)
合計	1,976	1,918	▲ 58	(3%)

※今週出荷量 = (前週末在庫 + 今週生産 + 今週輸入) - (今週輸出 + 今週末在庫)

2 国内/製品需給 (2) 在庫

10月16日時点の在庫は、ガソリン、灯油で積み増しとなり、その他の油種で取り崩しとなった。

前年に対してはC重油が増加し、その他の油種で減少となった。

ガソリンは151.1万kl、前週差1.0万kl増。前年に対しては35.6万kl少ない。

灯油は267.4万kl、前週差7.6万kl増。前年に対しては28.1万kl少ない。

軽油は142.2万kl、前週差3.9万kl減。前年に対しては15.3万kl少ない。

A重油は70.1万kl、前週差1.1万kl減。前年に対しては5.2万kl少ない。

C重油は183.2万kl、前週差7.8万kl減。前年に対しては3.7万kl多い。

(単位:千kl)

	今週 (10/16)	前週 (10/9)	前週比	
ガソリン	1,511	1,501	▲ 10	(1%)
ジェット燃料	813	837	▼ -24	(-3%)
灯油	2,674	2,598	▲ 76	(3%)
軽油	1,422	1,461	▼ -39	(-3%)
A重油	701	712	▼ -11	(-2%)
C重油	1,832	1,910	▼ -78	(-4%)
合計	8,953	9,019	▼ -66	(-0.7%)

### 3 国内/製品卸売価格 (1) 元売会社 仕切価格改定動向

10月12日～18日の指標原油価格は前週(10月5日～11日)比で値上がりし、為替レートは円安で、円建ての原油コストは値上がりしたものと見られる。

次週(10/21～27)の大手元売卸価格は、ガソリン・灯油・軽油ともに、前週比2.5～3.0円の引き上げとなった模様。

### 3 国内/製品卸売価格 (2) 業転価格・先物価格動向

10月12日～10月18日の製品スポット市況は、10月5日～10月11日平均と比べ全油種・全取引で値上がりした。

直近週(10/12～10/18)の陸上スポット価格平均値は、前週(10/5～10/11)比で、ガソリンは2.4円の値上がり、灯油は2.0円の値上がり、軽油は2.2円の値上がりだった。

東京湾渡しの海上スポット平均価格は、直近週(10/12～10/18)に、前週(10/5～10/11)比で、ガソリンは2.8円の値上がり、灯油は2.7円の値上がり、軽油は2.4円の値上がりだった。

先物価格の平均は、前週比で、ガソリンは3.5円の値上がり、灯油は2.9円の値上がり、軽油は1.6円の値上がりだった。

(RIM)		(単位: 円/%)		
(陸上ローリー4地区平均)	今週 (10/12～10/18)	前週 (10/5～10/11)	前週比	
レギュラー	74.5	72.1	▲ 2.4	
灯油	75.0	73.0	▲ 2.0	
軽油	75.3	73.1	▲ 2.2	

(TOCOM)		(単位: 円/%)		
(期近物/終値) [平均]	今週 (10/12～10/18)	前週 (10/5～10/11)	前週比	
レギュラー	75.6	72.1	▲ 3.5	
灯油	75.4	72.5	▲ 2.9	
軽油	76.3	74.7	▲ 1.6	

※上記価格は税抜き価格

参考値 (10/12～10/18実績値)		(単位: 円/%)	
油種	現物	先物	平均
ガソリン	▲ 2.4	▲ 3.5	▲ 3.0
灯油	▲ 2.0	▲ 2.9	▲ 2.4
軽油	▲ 2.2	▲ 1.6	▲ 1.9
A重油	▲ 2.2		

(出所) 現物: RIM社陸上ローリー4地区平均価格

(千葉・川崎・中京・阪神)

先物: TOCOM京浜地区海上バージ渡し平均価格

### 4 国内/製品小売価格

10月18日時点のSS店頭価格は、ガソリンが前週(10月11日)比2.5円高の164.6円、軽油は同2.5円高の144.4円、灯油は18㍈ベースで同46円高の1,860円(1㍈ベースでは同2.5円高の103.3円)。ガソリンは7週連続の値上がり、軽油も7週連続の値上がり、灯油も7週連続の値上がりだった。

ガソリンについて、都道府県別には、値上がりは46都道府県で、横ばいが1県、値下がり対象がなかった。全国最安値は159.3円の埼玉県(同2.1円高)、その次は、159.7円の岩手県(同3.2円高)、他方、最高値は172.4円の長野県(同2.8円高)だった。最も値上がりしたのは同4.3円高の滋賀県

(165.3円)で、横ばいは高知県のみであり、値下がり対象がなかった。

今週(10月12日～18日)の指標原油価格は値上がりし、為替レートは円安で、円建ての原油コストは値上がりしたものと見られる。次週(10月21日～27日)適用の元売の卸価格は、ガソリン・軽油・灯油ともに、前週比2.5～3.0円の引き上げとなった模様。次回調査時(10月25日)のガソリンの小売価格は、値上がりが予想される。

(資工庁公表) [週動向]		(単位: 円/%)		
	今週 (10/18)	前週 (10/11)	前週比	直近高値
レギュラー	164.6	162.1	▲ 2.5	08/8/4 185.1
灯油	103.3	100.8	▲ 2.5	08/8/11 132.1
軽油	144.4	141.9	▲ 2.5	08/8/4 167.4

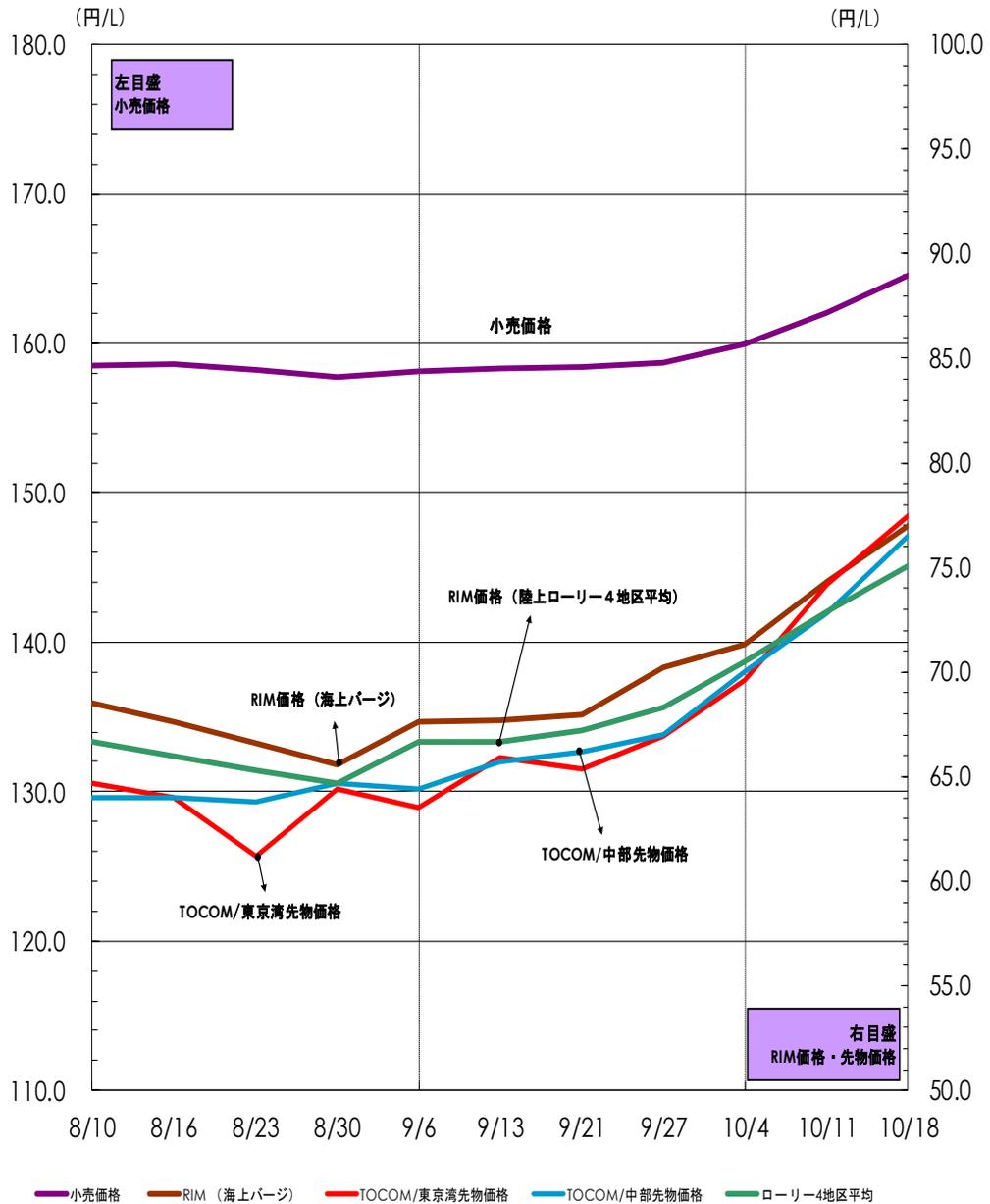
※ 現金一般価格の全国平均値 (消費税込み)

07年4月以降 2,000店舗を対象。

直近高値とは2003年10月以降の最高値。

# ガソリン価格推移

(2021/8/10 ~ 2021/10/18)



(注)①「小売価格」は消費税込みの価格 RIM価格・TOCOM先物価格は税抜き価格  
 ②RIM価格(陸上ローリー)は4地区平均価格

## ■ お知らせ

本レポートは当センターのホームページ (<https://oil-info.ieej.or.jp>) にも掲載しています。  
次回 (2021第29号) の公表は、10/29 (金) 14:00 です。

「セルフSS出店状況」(令和3年3月末現在) は、8月25日 (水) 14:00に公表しました。当センターのホームページをご覧ください。

### 本レポートのご利用について

本レポートについて、テキスト、グラフィックス及びその他の情報(以下、併せて「ドキュメント」)に関わるすべての知的所有権は、一般財団法人日本エネルギー経済研究所石油情報センター(以下、当センター)又は当センターヘドキュメントを提供している第三者へ独占的に帰属します。  
当センターの事前の書面による承諾を得ることなく、ドキュメントを転用、複製、改変等の一切を固く禁じています。  
また、ドキュメント内容に関しては万全を期していますが、その内容の正確性および安全性を保証するものではありません。

### 「ウィークリー オイル マーケット レビュー」とは

平成16年5月に経済産業省資源エネルギー庁資源・燃料部石油流通課 主催の「石油製品市場動向研究会」が取りまとめた中間報告で、「わが国石油産業における市場機能、価格発見機能が更に強固なものとなることが望まれるとともに、中期的な課題として、石油産業において確立していく市場機能、価格発見機能に基づく合理的な価格認識及びそれを踏まえた自己責任の下での経営判断の必要性について、石油産業関係者の認識が更に深まることにより、わが国の基幹産業である石油産業全体としての合理性、活力が一層高まることを期待したい。」と提案されています。  
当センターでは、これを受けて石油連盟、全国石油商業組合連合会をはじめ関係機関等の協力を得て、石油関係者、企業の経営者層(特に給油所経営に携わる方々)から一般消費者の方々に対し、原油・石油製品需給や価格動向を的確に理解するツールの一つとして、「ウィークリーオイルマーケットレビュー」を平成17年5月より定期的に発信しています。

### 本レポート掲載データの出所について

#### ①【原油・石油製品需給】〈石連週報〉

石油連盟(石連)「原油・石油製品供給統計」週報データを千KL単位に換算して採用。  
「出荷」は当センターの推計。

#### ②【原油・先物価格】〈WTI原油、中東産原油〉

WTI原油は、ニューヨーク商業取引所(New York Mercantile Exchange : NYMEX) WTI原油先物の期近物・終値を採用。  
中東産原油は、東京商品取引所(The Tokyo Commodity Exchange : TOCOM) 中東産原油の期近物・終値を採用。 ※「二番限(翌月限)」  
中東産原油は、ドバイ原油及びオマーン原油の平均価格を指標としている。為替換算レートとして、三菱東京UFJ銀行発表TTM (Telegraphic Transfer Middle rate : 中値) を採用。  
原油CIF単価は、財務省貿易統計「原油・粗油平均CIF単価」(旬間値) を基に、石油連盟が試算したドル表示の参考値を採用。

#### ③【国内製品・元売仕切価格】

元売仕切価格は、元売会社(一次卸)と系列特約店など(二次卸)との間で売買される卸価格。

元売会社は、平成22年4月以降、現行の新価格体系を見直し、原油や製品相場、他社仕切りなどの動向を総合的に判断し、具体的方針を決める方式に変更。さらに平成26年6月以降、原油コストをより重視する方式に変更している。

#### ④【国内製品・業転価格】〈RIM業転〉

国内陸上ローリー価格は、リム情報開発株式会社(RIM)「LORRY RACK・レポート」の千葉、川崎、中京、阪神の4地区の平均値を採用(いわゆる4RIM価格とは異なる)。

#### ⑤【国内製品・先物価格】〈TOCOM〉

TOCOM 東京湾及び中部石油製品期近物・終値を採用。  
TOCOM東京湾は京浜地区海上バージ渡し価格(平均値)、TOCOM中部は中部地区陸上ローリー渡し価格(平均値)。

#### ⑥【国内製品・小売価格】〈週動向調査〉

約2,000 SSを対象に週次ベースのSS店頭における店頭現金価格の全国平均値を採用(資工庁公表)。原則として、毎週(月)時点の価格を調査し(水)14:00に公表(資源エネルギー庁HPに掲載)。